

第 61 回 歴史リレー講座「^{うばそく}優婆塞宗教の勧め in 王寺町」田中 利典氏 (R1.10.20)

仏教における優婆塞とは在家のまま修行する男性信者のことで、^{うばい}優婆夷（在家女性）、^{びく}比丘（出家男性）、^{びくに}比丘尼（出家女性）と合わせて^{ししゆ}四衆と呼ばれます。私が有史以来日本で最も愛された三大偉人を挙げるとすれば、聖徳太子、弘法大師（空海）、役行者でしょう。太子は 22 歳の頃、推古天皇から皇太子の位を授けられるものの、出家を理由に一度は丁重に辞退しました。しかし、その願いは聞き入れられず太子は摂政という地位を保ちながら優婆塞仏教者として生きることとなります。

役行者は同じく飛鳥時代に大和葛城山麓に生まれ、17 歳で出家しました。私が長膺を務める吉野山金峯山寺は役行者が開いた修験道の総本山です。役行者は不思議な行力を修めた山伏であり、彼もまた優婆塞でした。故郷葛城山に最初の修験（山伏宗教）道場を開き、金剛山や大峰山などをはじめとする霊山を日本中に開きましたが、その術は世人を惑わすとして伊豆に流刑されるという憂き目にも遭っています。

山伏の二大修行が葛城と大峯です。葛城修行は明治時代に下火になりましたが、近年再び葛城二十八宿（役行者が 28 品の経を埋めた場所）をたどる動きがみられます。そのルートは和歌山県友ヶ島から金剛山、葛城山、二上山を越えここ王寺町の明神山から亀の瀬岩に至るというもの。一方、大峯修行の基本ルートは熊野から吉野です。修験の二大聖地の終着点が吉野と葛城の王寺近辺であり、役行者も聖徳太子も優婆塞であることから、太子ゆかりの王寺町と役行者には深いご縁があります。

そもそも仏教とは、釈尊（釈迦牟尼）が人々を救うために説いた教えであると同時に自身が仏になる（解脱する）ための教えでもあります。仏という漢字の元々の意味は「煩惱から解き放たれた人」。仏教が 6 世紀頃に日本に伝来した当時は優婆塞仏教が主流でした。修験道をわかりやすくたとえれば、グローバルな仏教とローカルな神道が融合して発展してきた日本独自の仏教、すなわち懐深いグローバルな宗教だといえます。

その修験道の特徴を説明しましょう。まず、大自然を道場に自分の体を使って修行する実践宗教であること。日頃の生活で汚れた心体を祈りを通して清めていくのです。そして権現（神仏習合）を祭る神仏混交の宗教であること。普段の生活を続ける優婆塞宗教であること。修験道の目的は山の行で得た力を里で生かすことなので、民衆との関わりを非常に重んじる宗教なのです。

ここからは、近年ないがしろにされがちな弔いや葬儀について考えます。未知の「死」に想いを馳せ、祈りや弔いを行う動物は人間だけです。江戸時代には檀家制度が成立し仏式で葬式を行うことが一般的になりました。しかし、仏教＝葬式ではありません。自分自身で祈り、限られた人生をどう生きるのかを学ぶのが仏教であり優婆塞です。なお、現代の日本に出家僧はほとんどいません。出家とは社会との関係を断って僧だけで暮らすこと（サンガ）であり、布施のみで成り立ちます。ですから日本仏教に戒はあっても律（サンガの規律）はありません。一方、修験は日常生活を大事にしながらよりよく生きる術を身に着ける宗教です。人間は他者の手を借りずに生きていけません。この世の真実は地域、自然、先祖との繋がりの中にこそあるのです。

ここで思い出されるのが聖徳太子が唱えた「和の精神」です。祈りや弔いも繋がりにほかなりません。死んだら家族に迷惑をかけたくないとか葬式不要だとか、私たちは選択の自由が多すぎるあまり却って不自由に陥っていないでしょうか。死後のことは生きている人に任せ、今を生きることに最善を尽くすのです。私は「宗教吊り革論」という理論を独自に展開しています。生きていくうえで事件に遭遇したときにサッと掴める吊り革のように、宗教を自分の周辺に備えておくのです。これからの AI 時代、人間にはますます余暇が増えます。より良く生きるためにこの時間をどう充実させるかを考えるべきです。そのためには従来の規範であった政治、経済、情報技術に加えて宗教が重要な役割を果たすことは間違いないでしょう。